

きいてくらしやい 昔話

—長岡民話の会—会報第 16 号 平成 23 年 12 月発行—

気が付けばもう 12 月。このところ一年の過ぎるのがまた早くなったような気がします。皆さま今年もお疲れ様でした。今年もいろいろなことがありましたが、互いに助けあい、心寄り添って生きる絆を強く確かなものにする事ができた一年であったような気がします。古の語り伝えと新しい知恵で、「希望の明日」を築いてゆけることを信じて元気に新しい年を迎えましょうね。さて、お待ちかねの会報をお届けします。(干)



☆活動報告と活動予定

日程	内容
8 月 19 日 (金)・20 日 (土)・21 日 (日)	第 6 回長岡民話百物語 (カーネーションプラザ=旧大和長岡店 1 階) 来場者数：335 名
9 月 17 日 (土)・18 日 (日)	全会津民話祭り参加・交流会 東山温泉 東鳳 9 名参加
9 月 23 日 (金・祝)	越後長岡語りの世界—昔話と瞽女唄 (長岡リリックホール・シアター) 第 2 部：「語り」の実演 3 名出演
11 月 26 日 (土)	うつくしま未来博 10 周年記念：からくり民話茶屋 ふくしまこころの復興民話祭 福島県郡山市で行われた祭りに新潟代表として倉地さんが参加しました。
12 月 2 日 (金)	小国の法末で昔話を聴く会 長岡法末自然の家「やまびこ」にて山崎正治さん・鈴木百合子さんの昔話を聴く。19 名参加
平成 24 年 1 月 28 日 (土)	☆新年会 13:30~14:30 阪之上コミセンにて例会 15:00~17:00 日本海庄屋にて新年会 (長岡駅東口 ホテルメッツの下) TEL: 37-3711 会費：4,000 円 申込〆切：1 月 11 日 (水) 幹事：4 班姉崎さんまで

12 月 2 日は長岡小国法末自然の家「やまびこ」で山崎正治さんと鈴木百合子さんの語りを聞くことができました。思いのほかお元気な山崎さんのいつもの名調子に聞きほれ、又、鈴木さんのいつものやさしい語り口にはっかりしているうちに、あっという間の 1 時間半でした。

そして、いい歳(?)をした私達が、ワクワク、ドキドキしながら小国までお話を聞きに行くというこの気持ちを今の子供達にも伝えたいと思います。そのためには語りの精進はもちろんのことなにかしらの工夫も必要でしょうか?そんな事を考えた一日でした。



昔話のトイレ

上村花菜という人の唄う「トイレの神様」が昨年評判になり、紅白にも出場した。これは、トイレには女神さまが居て、トイレをきれいにすると別嬪になれるとおばあちゃんから聞いた話を元にして唄っている。

昔話の中に登場するトイレは多い。もちろんトイレなどという言葉は使うはずがない。「便所」もしくは「あっぱんじょ」である。大便を意味する「あっぱ」、小便を意味する「しょんべん」は今死語になってしまった。ウンチ、オシッコである。昔話「三枚の札」にはトイレが出てくる。小僧が山姥から逃げようとして「たれこちになった」(便意を催した)としてトイレに行く事を要求する。山姥はこの手の中でせよという。それが出来ないというと、小僧の腰に縄をつけて、トイレに行く事を許す。「小僧まだかや」という山姥に「まだまだビッチビチの盛り」と答える。そしてトイレの柱に札を張るとトイレの神様が山姥の問いかけに答えて、小僧の逃走を助けてくれる。高橋ハナさんの「孫兵衛のおっかんがり」では、臆病もので夜中一人でトイレに行けない孫兵衛が、妻の助けを借りて、臆病を直す場面が出てくる。子供達は「三枚の札」の話が好きである、その理由はトイレの中で山姥と小僧の掛け合い文句にあるという。教室の中でウンチやオシッコの話は、たしなめられるが、そういう語を使って大人が顔をしかめるので、かえって面白がって大人をからかおうとする一面もある。

トイレの話を書きだすときりがない。昭和20年代初め、家のトイレは入り口に小便所、奥に大便所だった。便所は窓が無く真っ暗で、がたがたした戸を開けると回りの壁土がパラパラ落ちてくるような便所だった。このトイレの建物は、父が作ったものだった。この便所工事中は外の便所だったので、雨が降っている時などたいへんだった。新しく出来た便所も四角に板を切り抜いてその前に垂直に板を立てそこに取っ手が付いていた。この板は「キンカクシ」と呼んでいた。この地方の「なぞなぞ」に「あったら座敷に板一枚足りないのはなんだ」というのがあって答えは「便所」だった。便所の落とし紙も柿の葉や葛の葉(ふじっぱとよんでいた)が代用に使われていた。この葉は、日が経つと乾いて粉々になってしまっていて使いにくかった。その後、新聞紙や本の紙を破って使用した。便桶と床の間に隙間があって、光が差し込み、夏の暑い日には便桶に尾の付いた蛆がわいているのが見えた。この蛆をゴウジとよんでいた。この蛆が部屋の筵の上を這っている事もあった。「ウナゴウジの高上がり」とは、器でない人物が無理に背伸びして偉くなろうとすることを批判するという十日町地方の諺である。十日町の妻の実家に行った時、トイレの落とし紙は使用後便桶に落とさず、脇の竹籠に入れてあった。下肥を肥料にするには紙が混ざっていると使いにくいということだった。

小学校に語りに行った時、子ども達から、汲み取り式のトイレを「ぼったんトイレ」という名を覚えてもらった。下に大きな穴があいたぼったんトイレは怖くて入れないという子供の話もきいた。幼稚園に通っている子供達が、腰掛式の洋式トイレに慣れて、しゃがんで用を足す和式トイレでは用が足せないと聞いた。昔話のトイレに子供達はどのようなイメージを持ち、どう伝えられてゆくのか。





ふくしま心の復興民話祭に参加して

倉地 祐子

去る11月26日・27日と郡山で開かれた民話祭に参加してきました。

高橋先生から、今回のことについてお電話をいただいたとき、“復興”という言葉が耳に残りました。連日報道される福島の様子。「中越地震を経験した者としてこれを断るわけにはいかない。」こんな生意気な気持ちから郡山行きをお引き受けした私でした。

ところが、ところが・・・福島県の人たちのパワーや民話の素晴らしさ、語り部や会にかかわる人たちの温かさ、これらにすっかりパワーをもらったのは私のほうでした。

この会は、「うつくしま未来博・からくり民話茶屋」の10周年を記念して開催されたものでした。その後、「NPO語りと方言の会」ができ、駅構内の「民話茶屋」をはじめ、いろいろな活動をしていることは、よく知られていることです。

その10周年をいざ開催、という時に起こった大震災で会場となる施設がほとんど被害を受けて、使えなくなってしまったのだそうです。そこで、会場となったのは、なんと、ショッピングセンターの立体駐車場。ほとんど吹き曝しのその3階を借りうけての開催でした。そのような所でも、会を成功させようとする福島の人たちの熱気が会場にあふれていました。

民話の語りだけではなく、福島の民俗芸能の発表もありました。県内各地の神楽や舞が披露されましたが、被災地や原発の影響で避難している地域の人も参加していました。それらのことに、福島の人々の力強いパワーを感じました。

次に、民話の素晴らしさについて感じたことを記します。

福島の人7名、青森、秋田、山形、岩手、宮城、それに私の6名、計13名で二日語りました。皆さんほとんどが親や祖父母に聞きたいいわゆる伝承の語り部です。ステージにあがると、題名など言わずに「そばの話をしましょう。」という具合に語り始めます。聞いていると、それは「天道さま金のくさり」なのです。そのようにして次々と語られました。

福島県の「手長、足長」で磐梯山が出てきたほかは、ほとんど地名や固有名詞は出てきません。ほとんどが新潟県にもある話です。でも横手の高橋さんが語ると秋田の話に聞こえ、新庄の渡部さんが語ると山形の話になるのです。

語りには、落語のような落ちもなければ、派手な身振りもありません。みなさんボソボソと語られますが、時々クスッとおかしかったり、ジーンときたりしながら話に引き込まれていきました。これこそ民話や方言の魅力であり、力なのだと強く感じました。

最後に、この二日間で1番こころに残ったことは、津波で被災された87歳の語り部、小野トメヨさんが交流会で話されたことです。

「津波にみんな持っていかれてしまいました。形あるものは、流されましたが、私には民話があります。」

私にとって最高の二日間でした。ありがとうございました。





入会一年

小林 厚子

「昔むかし、あったてや」と語ってくれた祖母や母の昔話の内容は、よく覚えていませんが、「それから・・・？」と先を知りたがり、「いきぽ～んさけた」と言われると「もうひとつ。」とせがんだ事はよく覚えています。

第二のベビーブームの息子達は、テレビの「日本むかし話」が大好きで、毎週土曜日は夢中で見ており、昔話の絵本を何度も見ておりました。本の読み聞かせはしましたが、昔話を語ってあげた記憶はあまりありません。

すばらしい文化の昔話。大切に伝承される必要があると個人的には考えております。数年前、知人に誘われて、アトリウムで民話をお聞きし、子供だけではなく大人にも素朴でほのぼの温かく、楽しいものだと感じました。

そこで、「長岡民話の会」の存在を知り、退職後、例会見学をさせていただきました。充実した立派は組織に気後れし、無謀であった自分に気づきました。それでも何度か寄せていただくうちに、「語ってみなさい。」「読むより実際に語る事だよ。」と背中を押していただき、公民館で初語り。「上手な人に交じり、恥をかきながら実践してこそ伸びる。」と何かにあったので、勇気をもって語ってみました。とても恥ずかしくて緊張しましたが、汗っぱいの心地よい経験でした。

この夏、「百物語」に初参加させていただき、準備や設営の労力も大変なことを知りました。どのように手伝ったらよいのかも、身支度も全く分からなすぎて、足手まといである事に不安がいっぱいになりました。その内、先輩方の語りに引き込まれてしまい、自分の番を忘れそうでした。同じ題名でも語り手によって表現方法が違い、深みと魅力を感じました。終了後の慰労会(?)も和やかで賑やかで、立派な組織団体での感激の経験でした。

入会させていただいて九月で丸一年。会員の皆さんにはお世話になったり、ご迷惑をおかけしながらですが、私はとても新鮮で楽しいです。

聞くこともおもしろいですが、語る事も聞き手の反応が分かって、こちらもおもしろいです。すぐ側で膝を寄せ合って、お顔を見ながら語る時は、昔話に最高の魅力を覚えます。素朴で温かく、善悪の教えがあって、想像力を膨らませ、すばらしい文化で心に染み入ります。

この地に、日本に、そして世界に計り知れない数の民話・・・楽しみながら、でも欲張って沢山学ばせていただき、1人でも多くの方に語って差し上げられる力をつけたいと思います。そして、微力でも、永く会のお役に立てたらいいなあと一年目に思います。



発行者：長岡民話の会

連絡先：0258 (34) 5240 (安部)